

年1月、広島西条で開催された、全国学生相談関係者が集まったの共同セミナーで提案された成果は、文部省刊「厚生補導」第95号に、「学生の適応上の諸問題」として、その一端が要約されたし、また教育心理学会第16回大会（49年9月）でのシンポジウム、「教育と臨床」の席上、私なりの問題提起が、具体的な事例の紹介を前置きとしてすすめられた。大学における学生指導の上でも、臨床心理学的観点に即して問題とさるべき多くの観点があることを提案したかったからにはほかならない。

5) 臨床諸領域のうち、私自身今直接関与していない部門、矯正臨床とよばれるべき分野が第4にある。昭和35年から2年間、フルブライト研究員として、カリフォルニア大学に留学したときの主題はしかし、日米非行少年の比較研究であった。その成果は諸事情のため今日まで公にされる機会がなかったが、このたび当時の研究プロジェクトの主任であったDr. Devosの尽力によっ

て、彼との共著の形で、その一部が Lebra, W. P. 編に成る *Youth, Socialization and Mental Health* の第12章として陽の目をあびるに到った。Violence and Aggression in Fantasy: A Comparison of American and Japanese Lower Class Youthとの標題のもと、TATを用いてクロスカルチャー的研究を行ったものである。Dr. Devosに厚く感謝の意を表したい。

6) 今年もまた先学續教授の研究遺産のあとつぎは、すべて終るに到らなかったが、東京大学出版会刊行の「心理学研究法」シリーズ 第11巻「面接」を續教授との共編の形でようやく上梓し得た。さらに、昨年の中広研での仕事をうけついで、その続報としての「購買的動特性からみた商品類型の試み」が、電通久野らとの共同研究として、中部広告研究第6号に報告された。故教授の学恩に師いることまだ足りない自らを恥ずる次第である。

1 年 の 経 過 小 嶋 秀 夫

教室のスタッフに加わってからのこの1年は、過去の仕事の整理と、それを基にした将来の仕事への準備のために費やされた。

1. 親子関係自体の研究に関しては、自分の研究目的にとって最適の概念化と測定の問題を解決することが重要だと考えた。このことに関して、日本心理学会第38回大会のシンポジウムで提案した。また、関連した実証的研究は、近く、*Japanese Psychological Research* に現われる。

2. 1の研究と関連する子ども側の変数は、幾つかの側面から検討した。まず、いわゆる「認知様式」の領域では、WitkinやKaganの概念の測定の問題で障害が起り（日本教育心理学会第16回総会発表）、これを解決することが重要だと考えた。問題の1つは、用いる装置にあり、このinstrumentation問題に首をつっこむことになった。このうち、Rod-and-frame Testに関して学内の他学部の協力が得られ、測定精度を上げた装置が近く使用可能となる。もう1つの問題である測定手続きに関しては、従来のデータの再分析から、若干の手掛りが得られた。

攻撃性に関しては大きな進展はなかった。ただ、稿を求められたものを機会に、1969年の章（児童心理学講座

第8巻 金子書房）を補うものとして、理論的考察を行い、将来に備えた。これは、そう遠くないうちに現われると思われる（幼児心理学講座 第3巻 日本文化科学社）。

金沢で始めかけていた乳児の予備観察は、この1年間完全に中断した。条件を整備し、新しいアイデアで観察を開始するには、まだ若干の時間を要する。なお、将来に備えて、発達研究のデザインとデータ分析法を研究しつつある。

3. まだ極めて未熟な形においてであるが、社会における教育心理学・発達心理学の研究者としての役割の問題に、視野を広げる必要性を感じて来た。この関心は、間接的な形で、上述の攻撃性の考察、児童心理学の進歩1975年版の概観、および、久世・長田と共著の教育心理学年報1974年度の展望—家族関係の教育心理学的研究—の中に表現されている。

この1年、学内と学外（国内・国外）の研究者・院生の方から、有益な示唆を受け、有効な資料の提供を受けた。また、学内の技官や事務の方から、多くの助力を得た。いちいち、お名前はあげないが、これらの方々の援助と協力、場合によっては競合から、多くのものを得たことを感謝する。